

スポーツ史の対象範囲と政治的な目標設定

—ミヒャエル・クリューガーの「コメント」に対するコメント—

クリスティアーネ・アイゼンベルク* 著
有賀 郁敏** 訳

ミヒャエル・クリューガーは当然にも、私が国際比較研究を通じてスポーツ史の領域へ踏み込んだ一般史家の視点から論文を書いていることを確認している。彼自身、この点に対してスポーツ科学、より正確にはドイツのアカデミクなスポーツ科学の中で社会化されたスポーツ史家の立場に立っている。彼の関心事は、その学問的伝統（トゥルネン文筆家、「身体教育家」）をより深く考慮することである。これに対して、私の関心事、すなわちスポーツ社会学とスポーツ経済学という隣接領域、とりわけ新たな方向性としての「スポーツの経済学」との学際的共同の提案に、彼はほとんど応答してくれない。これでは読者には2人の執筆者間の意思疎通が混乱している、彼らは相互にすれ違っているといった印象を与えてしまうかもしれない。

なぜそうなるのか。ここで強調しておかなくてはならないのは、個人的な敵愾心ではないことである。というのは、ミヒャエル・クリューガーと私は数年来の旧知の仲であり、また一貫して友好的に相互に協力し合っているからであ

る。スポーツ史に関するわれわれの理解の2つの根本的な差異、すなわち異なったスポーツ概念とスポーツ教育学の役割に関する異なったイメージの中に、その根拠をよりよく見出すことができる。新たな学術誌『スポーツと社会』の創刊にあたり、この差異を明確に取り上げることが私には得策のように思われる。論争は議論を活性化させ、また学術誌はそこから利益のものをすることができるのだから。

1. スポーツ概念

ミヒャエル・クリューガーは「コメント」の中で、当然のことながら近代スポーツのみならず、トゥルネンや「身体教育」の他の領域を含んだ口語的な意味における広義のスポーツ概念を使用している。それに対して私の論文では、それがアングロサクソンの伝統によって特徴づけられた国際的なスポーツ史のなかで使用されているように、狭いスポーツ概念の定義で始まっている¹⁾。この狭いスポーツ概念の中心には、スポーツ的な競争、すなわち、国際的に申し合わされ、監督されたルールにしたがって実施される競争が位置づいている。近代スポーツの国際的なコミュニケーション能力や異なった

* フンボルト大学英国研究センター教授

** 立命館大学産業社会学部教授

社会的な部分領域、すなわち社交と社会構造、政治と経済、モード、身体文化などを結びつけるスポーツの能力は、このメルクマールに基づいている。競争原理はすべての近代スポーツ原理にとって、またたとえば近代の体操競技にとって本質的なものである。それはしかし、19世紀の歴史的なトゥルネン運動、「身体教育」あるいはジョギングやエアロビクスなどの余暇活動にとってさほど重要な要素ではない。

ミヒャエル・クリューガーは、今やトゥルネン運動の歴史にとってのエキスパートである。そして私のスポーツ定義が彼に気に入られないことは驚くにあたらない。むしろ彼がその異なった定義を明確に対象化し、可能ならば2つの評価の長所と短所を検討すれば、問題は生じなかったであろう。彼はしかし、そのことをしていない。彼は私の——そこではまったく普通ではない——定義に注意を向けることなく、また説明に際して暗黙のうちに独自のスポーツ理解を基礎に置いている。それによって彼は無意味なコメントを開始してしまった。

クリューガーはドイツのスポーツ史の他の多くの同僚たちとともに、通常のスポーツ概念とは異なるものへ、「議論するため」だけでも入り込むための準備が不足している。わたしはこのことを論争の中で再三経験してきた。根拠について熟考することが望まれる²⁾。しかしながら、この無関心の結果は明らかである。ドイツのスポーツ史が近代スポーツを対象相関的な概念で分析することを理解しないのなら、スポーツ史は近代社会にとってのスポーツ的競争が果たす展開の衝撃や国際関係を依然として認識できないであろう。とりわけ、国際的な次元が示しているスポーツそのもののみならず、たとえば個々の国民経済、国際経済、メディアそして

文化活動とも関連している現代の商業化傾向を適切に探究することに成功しないだろう。すでに経済学者がスポーツに関して理論的な分析を誘発されているように見え、特殊な「経済学」が展開されようとしているとき、スポーツ史家に属する「標準的経済人」が、自分はトゥルネン場の活動のようにスポーツマーケットを考察できるなどと考えるべきではない。

2. 教育学的衝撃

ミヒャエル・クリューガーは、スポーツ史家としてのみならず、スポーツ教育学者としても理解されている。それゆえ、とりわけ彼は19、20世紀のトゥルネン文筆家と身体教育者の歴史的伝統を高く評価する。今日の歴史家はそれらの著作を、おそらくその史料的価値のために援用する。加えてスポーツの真価に関する私の証拠をめぐる議論の中で明確になっているように、クリューガーの教育学的衝動は政治的・教育学的である。彼はそれを経済学の領野から政治の領野へと移し変え、例として第三帝国における自らの行為をスポーツの独自世界の性格への参照指示によって、後になってから正当化しようと試みたドイツのスポーツ連盟の役員たちをあげる。この正当化は「イデオロギー」であったことをハヨー・ベルネット、ハンス・ヨアヒム・タイヒラー、ロレンツ・プファイファーそしてドイツにおける『スポーツの現代史』の他の代表者たちは、すでに数十年前に明らかにしたとクリューガーは考える。それゆえドイツのスポーツ史では、独自世界の証拠は克服されている、と。また、それにもかかわらずそれを取り上げた者たちを、彼は政治的に単純なスポーツ史研究を弁護していると非難する。

私は歴史家として定義問題に対する無関心以上に、試みとして独自世界の根拠と相互に根本的に取り組むことを拒絶する態度が理解できない。なぜより古い解釈をより新しく再考すべきではないのか。歴史的な考察は経験的に「時代精神」によって影響されるのだから、むしろこのような検討が定期的実施しなくてはならないのではないのか。クリューガーによって提示された『スポーツの現代史』の研究に際して、いずれにせよ私にはそのことが必須のように思われる。というのは、イデオロギーとイデオロギー批判はせいぜいのところ、それが存在する時代に関する利害関係を映し出しているからであり、基礎となる社会構造への帰納的推定を可能としないからである。すなわち、仮にスポーツ連盟役員によるスポーツの独自世界の性格への参照指示が、1945年以降、ナチス体制との共同ないし協力の正当化に貢献したとしても、しかしそれは主張された実情、独自のルールにしたがって——そして独自の必要のために——機能した社会的局面の実態が示されているといえるのである。第三帝国におけるスポーツと政治の関係に関する私の独自の研究は、多くの点からこの推察を確認している (Eisenberg, 1999, 第IV章)。またスポーツとファシズムないし独裁政権との関係に関する国際的な研究でも、一致して独自世界の論拠の裏づけに貢献しているのが分かる³⁾。全体的にみれば、時代の診断は広範な考察を拠り所にして、次のような仮説を生み出す手がかりを提供しているように思われる。すなわち独裁体制下ではスポーツと政治との関係において、しばしば引用される政治によるスポーツの道具化が、それとは逆のスポーツによる政治の道具化よりも決定的ではなかったということである。

このような研究関心を「政治的に不適当なもの」「教育的に疑わしいもの」として思う者は、政治的教育学から離れるのがよいだろう。政治的公共性における仲介の可能性と限界を考慮して研究が実施されたり、あるいは中止されたりするわけにはいかないからである。いずれにせよ、私は一貫して次のように考えている。すなわち、興味を持つ人びとにとって最も有益で疑いなく「教育的に価値の高い」情報は知らされるべきこと、そして近代スポーツは、事情によってはその独自世界の性格を制約的な政治条件下においても保持することができることである。同様に人びとには、なぜそれが可能なかの説明がなされなくてはならない。このような情報をきめ細かく提供することは、スポーツ史の中心的な課題であると私は判断する。さもなければ、一体誰がその課題を解決するのであろうか。スポーツ史がこの課題を拒否するのであれば、それはスポーツの社会的影響力、またそれとともに自由な潜勢力をも失うことになるであろう。

注

- 1) これに関する詳細は Eisenberg (2002)。この論文は、タイヒラーの文献 (2003) に掲載された講義に基づいている。
- 2) ここでは、疑いなく、狭義そして広義のスポーツ概念の間の違いはドイツのスポーツ史の決定的な局面で不確定になった点が挙げられる。なぜならば、スポーツ、トゥルネンそして軍事スポーツを「体育」という概念の下で取りまとめようとする連盟役員、教育学者、政治家そして軍人がタイムリーに存在していたからである。この譲歩は1920年代のドイツにおけるスポーツ科学の編成局面でも基礎づけられ、また第2次世界大戦後のケルン体育大学の設立に際して、再度更新された。それは近代の社会科学と

その概念性は、さしあたり、問題の外に置かれたままという結論をともなった。身体運動のコンセプトに関しては、以下を参照。Eisenberg (1999, S. 283ff., ならびに第VI-Ⅷ章)。学問史的结果に関しては、Eisenberg (2002)。

- 3) 関連した叙述は欠落している。Vgl. Key (2001). 点在した証拠は、とりわけ以下の概説的試みにある。Krüger (1999) そして Riordan (1999)。フットボール史のなかで素描された診断は注目されている。つまり戦間期において、民主主義を重視し、スポーツを個人の事柄として見なしていたそれぞれの「フットボール国民」は、国際的に二流、三流な者へなり下がった。そこにおいて国民的な団体が独裁者の援助を得て補助金を手に入れ、また準政党的な大衆組織にサポートされて聴衆を動員する、「フットボール国民」が台頭した。Vgl. Eisenberg (1997) 所収の Riordan と Archetti の論稿参照。Giulianotti & Finn (2000) ; Marsch (1999)。

文献

- Eisenberg, C. (1997), *Fußball, soccer, calcio*. München: Deutscher Taschenbuch-Verlag.
- Eisenberg, C. (1999), *English Sports und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800-1939*. Paderborn: Schöningh.
- Eisenberg, C. (2002), Die Entdeckung des Sports durch die Geschichtswissenschaft. *Historical Social Research*, 27, 4-21.
- Giulianotti, R. & Finn, G. P. T. (2000), Epilogue: Old Visions, Old Issues — New Horizons, New Openings ? Change, Continuity and other Contradictions in World Football. In R. Giulianotti & G. P. T. Finn (Hrsg.), *Football Culture. Local Contexts, Global Visions* (S. 258-259).
- Keys, B. J. (2001), *The Dictatorship of Sport: Nationalism, Internationalism, and Mass Culture in the 1930s*. Ph.D. Thesis Harvard University. Ann Arbor/ MI: UMI Microform (No. 301 1402).
- Krüger, A. (1999), Strength through joy. The culture of consent under Fascism, Nazism and Francoism. In J. Riordan & A. Krüger (Hrsg.), *The International Politics of Sport in the Twentieth Century* (S. 67-89).
- Marschik, M. (1999), Between Manipulation and Resistance: Viennese Football in the Nazi Era. *Journal of Contemporary History*, 34, 215-229.
- Riordan, J. (1999), The impact of communism on sport. In J. Riordan & A. Krüger (Hrsg.), *The International Politics of Sport in the Twentieth Century* (S. 48-66). London: Spon.
- Teichler, H. J. (Hrsg.). (2003), *Moden und Trends im Sport und der Sportgeschichte*. Hamburg: Czwalina.